

あつと驚く話

JJ1SXA/池

ここは、北国の果て、雪国の果て、青森県は、三戸郡新郷村の事だ、ここに、「イエス・キリストの墓」があるという、「あつと驚く為五郎(…あまりにも古いかhi)」では無いが、全く驚きの話題だ。

イエス・キリストといえば、ゴルゴダの丘で処刑されその3日後復活して天に上ったとされている、「ゴルゴダの丘で磔刑になったキリストが実は密かに日本に渡っていた」、そんな突拍子もない仮説が、茨城県磯原町(現北茨城市)にある皇祖皇大神宮の竹内家に伝わる竹内古文書から出てきたのが昭和10年のことです。

日本のピラミッドを調査していた鳥谷幡山という画家に同行した竹内巨麿が、自分の家系に伝わる古文書と照らし合わせた結果、ここがイエス・キリストの墓だと発表したのです。

昭和10年に考古学者の一団が「キリストの遺書」を発見したり、考古学・地質学者の山根キク氏の著書でとりあげられたりして、新郷村は神秘の村として人々の注目をあびるようになりました。

キリスト教の伝来は1549年となっています、織田信長の認可によりイエズス会のフランシスコ・ザビエルらによって布教が開始されましたが、豊臣秀吉の時代になると仏教からの強い意向があり、布教は厳しくなります、そして徳川家康の時代では隠れキリシタンとならざるをえませんでした、それにしても、青森県三戸郡新郷村にある、ここが「キリストの墓」となれば歴史はまったく変わってしまいます。

ゴルゴダの丘ではりつけで死んだと考えられていたイエス=キリストだが、実は処刑されたのは弟のイスクリで、キリストは密かに逃げ延び、今の青森県八戸港から上陸していた。

名前を「十来太郎大天空(トライタロウダイテングウ)」と改名し、日本人の妻をもらい、そのあいだに3人の子供をもうけ、キリスト自身もかなり長生きしたらしい。

「キリストの風貌は、ハゲで鼻が高く、目が大きく、赤ら顔だった事から、天狗のようだった」「村の旧名を『戸来(ヘライ)村』と言い、『ヘブライ』が訛ってできた言葉ではないか」「この村の方言で、大人の男を『アヤ』『ダダ』、大人の女を『アバ』『アバ』と言い、それは聖書に出てくる『アダム』『イブ』が訛ってできた言葉ではないか」「生まれて間もない子供の額に十字を書いていたことや、足がしびれた時は指につばをつけて額に十字を3回書くとしびれが治るといふ村の言い伝えがあり、キリスト教信者が十字をきるのと類似している」「この村に伝わる『ナニヤドヤラー ナニヤドナサレノ ナニヤドヤラー』という音頭が、ヘブライ語で神をたたえる意味になる、またその旋律もユダヤで古来から歌われていたモノに似ている」等々…、この新説は、国内・国外問わず正式には認められていないわけであるが、新郷村では町をあげて「キリストの墓」の観光地化に努力しているようだ。



キリストの墓と、「十来塚」の杭